

静岡県立美術館 対話型鑑賞研修

平野智紀

内田洋行教育総合研究所

／経営学習研究所

／京都造形芸術大学アート・コミュニケーション研究センター



10月5日、静岡県立美術館にて行われたボランティア向け対話型鑑賞研修に、講師として登壇させていただいた。台風18号が迫る中、美術館における大人向けギャラリーツアーや団体鑑賞をどのようにしていくべきか、理論と実践を往還した対話をすることができた。

上席学芸員の川谷承子さんによると、開館28年を迎える静岡県立美術館は、ボランティアによるギャラリートークを早くから取り入れてきたという。しかし、当初はボランティアが作品について調べ上げたことを作品の前で披露するという形式のもので、どちらかという鑑賞者よりもボランティア自身の自己研さんの機会であった。これを5年前から対話を取り入れたギャラリーツアーへと改組したが、解説型のトークを学んだ古参のボランティアと、対話型のツアーに親しんだボランティアがそれぞれおり、みなさん試行錯誤でツアーに取り組んでいるところだということであった。今回の研修は、ギャラリーツアー班の20名を中心に、学校の団体鑑賞を担当する学校班等、他のボランティアグループからもご参加をいただいた。

前半は、「美術館における大人とアートのコミュニケーション」というタイトルでレクチャーをさせていただいた。対話型アート鑑賞が求められる背景について、20世紀はじめの来館者研究や美術教育、認知心理学等の視点を引用しながら解説した後、実践編として、京都造形芸術大学アート・コミュニケーションプロジェクト（ACOP）で行われているナビゲーションのコツについてお話しした。ACOPで何度も強調されているとおり「人は、みたいものを、みたいようにしかみない／みえているものは、みている人の数だけある」ということ、それを解決するために、ファシリテーションの中でfact（事実）とtruth（解釈）を区別する必要があること、factとtruthをうまく引き出し、対話を進めていくための3つの問いかけがあること等を説明した。

レクチャーの最後には、対話型鑑賞という活動だけをぼんと取り入れるのではなく、どんな場所でやるか（空間）、何人ぐらいでやるか（共同体）、どんな仕掛けを取り入れるか（ツール）等、「空間・ツール・活動・共同体」をトータルで考えて学習環境をデザインしていく必要性について述べた。

後半は、作品画像をプロジェクションしての対話型鑑賞体験である。作品は「カラカラ帝」。怒っている人、戦う人といった印象から始まり、目から何かを見据えている、そうではなくて焦点が合っていないようにも思う、向かって右の目の影からは後ろ暗い印象も受けるといった意見が次々と出てきて、30分ほどの鑑賞時間はあっという間に過ぎた。

オブザーバーとして参加して下さっていた静岡大学の益川弘如先生は、学習環境デザインの視点を受けて、学校教育における21世紀型スキルの導入に触れ、美術館での対話型鑑賞の事前・事後の授業デザインをどうしていくべきかという提起をしてくださった。私からは、アメリカの対話型鑑賞法ヴィジュアル・シンキング・ストラテジーズ（VTS）において用いられている自由筆記課題を紹介し、これを取り入れることで鑑賞体験を別の形で評価・記述できる可能性について言及した。

川谷さんからは、美術館ワークショップにおける学習環境デザインの事例についてご質問いただいた。私からは、「ミュゼオバトル」や「ポスカホリック・ワークショップ」といった、対話型鑑賞法のエッセンスを取り入れた上でそれをアレンジしたワークショップを紹介した。

「対話型鑑賞を対話型鑑賞だけでデザインしない」ことは、私自身がずっと気を付けていることでもある。どんな文脈に対話型鑑賞を取り入れるかによって、その見え方は大きく異なる。今回の対話型鑑賞研修も、研修に参加するボランティアのみなさんの積極的な姿勢に支えられたところがある。今回の研修が、美術館の現場で実践を重ねられているボランティアのみなさんの参考に、少しでもなっていたら幸いである。



※本研修の様子が、10月8日付の静岡新聞朝刊に掲載された。

アートの対話型鑑賞法を詳しく 県立美術館でも研修会

静岡市駿河区の県立美術館で5日、アートを鑑賞する人の感想を重視する「対話型鑑賞法」の研修会が開かれ、ギャラリートツアーのボランティア20人が実践

ントを確認した。アクトシティ浜松の見学も行い、研修参加者は本番、出場者を誘

導する順路を思い描きながら、施設内を歩いて回った。コンクールは11月8

日から20日まで。予選、本選のほか、入賞者が出場する記念コンサー

主体的なアート鑑賞について考えた研修会
＝5日、静岡市駿河区の県立美術館

のポイントを学んだ。講師を務めた宇野智紀さん（磐田市出身）は、アート学習のワー

クショップを各地で展開する京都造形芸術大学嘱託研究員。アートに触れた人の創造力を喚

起し、人とのコミュニケーションを促す対話型鑑賞法を発信している。

有効な鑑賞法として「見る・考える・話す・聴く」のサイクルを提案。「作品の見え方は見ている人によって違う。主体的に作品と向き合い、人への問い掛けて鑑賞の幅を広げてほしい」と呼び掛けた。

県学校

静岡新聞社は県内の高校を対象に2014年度学校新聞コンクールを催します。

【応募規定・方法】11月以降に中学、高校で発した学校新聞1紙を、所定募用紙（静岡新聞ホームページ）に添付し5部